

韓国における『古事記』研究 (五)

—二〇二二～二〇一三年の学術論文を中心に—

田 中 千 晶

韓国における『古事記』の専門的な研究は近代から始められ、特に一九八〇年代以降、本格的に研究が進展し、近年では年間十数本の研究論文が発表されている。『古事記』に関心を寄せる理由として、韓国に関連した記述の存在、神話の類似性などが指摘されている⁽¹⁾。

本稿では、近現代における『古事記』の受容研究の一環として、韓国ではどのように『古事記』が研究されているのか、また用いられているのかについて明らかにしていくため、近年の学術論文を紹介する。今回紹介する二〇二二～二〇一三年の特徴としては、漢字表記に関する論考が増加したこと、近世の本居宣長に関する論考が出てきたことである。また、論考の末尾に日韓の歴史論争に関して著者なりのメッセージを記すものもある。

二〇〇〇年までの研究動向及び、二〇〇〇年～二〇一一年における研究論文リストに関しては、拙稿⁽³⁾を参照されたい。

研究年表 (二〇二二～二〇一三年)

	題目	著者	学術誌名、巻号	発行所	発行年
1	須佐之男の歌再考	朴美京	人文学研究 89	忠南大学校人文科学研究所	二〇二二・一
2	近世における王仁伝承—王仁が伝えた漢籍に対する論議を中心に	チョンテウク	日本学研究 35	檀国大学校日本研究所	二〇二二・一
3	上代神名における借訓表記	崔建植	日本研究 32	中央大学校日本研究所	二〇二二・二
4	『三國遺事』「延鳥郎・細鳥女」と『古事記』「新羅王子天之日矛」説話の比較分析研究	イボンイル	国際韓人文学研究 9	国際韓人文学会	二〇二二・二

※番号に□を付した論文は後に要旨を記載する。

論文の検索については、R I S S (Research Information Service System)⁽⁴⁾を基本とし、補助的にK S I学術論文情報とDBpia⁽⁶⁾を用いた。R I S Sで検索対象を韓国内学術誌の論文とし、キーワード「古事記」で検索すると、二五七件がヒットした⁽⁷⁾。このうち本稿では、二〇二二年～二〇一三年の二年間について紹介する。この期間では二十六件の検索結果が得られたが、題目や本文内に加え、論文のキーワードとして登録されている「古事記」も検索されるため、論文の主旨が『古事記』に限らないものも含まれている(研究年表の8、13等)。しかし『古事記』が各方面の研究分野からどのように用いられているかを知るためにも、件数に含めることとする。すべての研究論文の内容を紹介することは困難であるため、発行年順に題目等を記した研究年表を挙げ、一部の論文について要旨を掲載した⁽⁹⁾。二〇一四年以降の論文に関しては、後の機会に譲ることとする。

◇

5	大和王朝の降臨伝承に関する一考察―記紀の神代巻と天孫降臨神話	金祥圭	東北亜文化研究 30	東北アジア文化学会	二〇一二・三
6	韓国に兎説話を伝えた日本古代氏族―日本『古事記』の兎説話を中心に	魯成煥	東北亜文化研究 30	東北アジア文化学会	二〇一二・三
7	「皇国」の「古事」で証明する世界―本居宣長『古事記伝』の注釈と方法について	裴寛紋	日本文化學報 53	韓国日本文化学会	二〇一二・五
8	韓国における日本古典文学研究の現況と課題	許坤	日本學報 91	韓国日本学会	二〇一二・五
9	『古事記』における「恐怖心」の表記に関する考察	清水れい子	日本研究 13	釜山大学校日本問題研究所	二〇一二・六
10	『古事記』『日本書紀』における「韓」―テキスト論的な観点から	金静希	比較日本学 26	漢陽大学校日本学国際比較研究所	二〇一二・六
11	上代日本文献神話の成立と韓国系移住民研究	李昌秀	日本研究 53	韓国外国語大学校日本研究所	二〇一二・九
12	古事記神話における英雄の描き方―大國主神を中心に	チェウオンジェ	日本語文学 51	日本語文学会	二〇一二・十一
13	日本語における定訓漢字の変遷に関する研究	鄭炫赫	日本研究 54	韓国外国語大学校日本研究所	二〇一二・十二
14	本居宣長『古事記』の「読み」と「宣長問題」	朴奎泰	日本歴史研究 36	日本史学会	二〇一二・十二
15	韓国と日本の古代文献に現れた白色の比較研究	イヨンスク	比較文学 59	韓国比較文学会	二〇一三・一
16	韓国における『古事記』の因幡の白兔型説話に関する研究	魯成煥	日本語文学 60	日本語文学会	二〇一三・二
17	遼河文明と古朝鮮の実体	金采洙	日本研究 18	高麗大学校日本学研究センター	二〇一三・二
18	『記紀』神話テキストとパリアント (variant) 創出の間で	全成坤	アジア文化研究 29	嘉泉大学校アジア文化研究所	二〇一三・三
19	東アジアから見た因幡の白兔説話	魯成煥	日語日文学研究 85―2	韓国日語日文学会	二〇一三・五
20	『古事記』漢字用字的量義音研究	海村惟一	漢字研究 8	慶星大学校韓国漢字研究所	二〇一三・六
21	日本上代文献の中の継体天皇と古代環東海交流に関する考察	李昌秀	日本研究 35	中央大学校日本研究所	二〇一三・七
22	上代神名の二合漢字	崔建植	日本研究 35	中央大学校日本研究所	二〇一三・七
23	『古事記』『日本書紀』に現れた「禊」に対する考察	朴信映	日語日文学研究 86―2	韓国日語日文学会	二〇一三・八
24	日本文学に現れた一夫多妻制下の女性像考察のための試論―上代から中世まで	金ナンジユ	東方学 28	韓瑞大学校東洋古典研究所	二〇一三・八
25	日本古典文献に見える韓国系移住民の一考察―王権神話イデオロギーを中心に	李昌秀	日本思想 25	韓国日本思想史学会	二〇一三・十一
26	初考『古事記』的字典功能	海村惟一	漢字研究 9	慶星大学校韓国漢字研究所	二〇一三・十二

論文要旨 (年表より抜粋)

- 1 朴美京「須佐之男の歌再考」(『人文学研究』89、忠南大学校人文科学研究所、二〇一二年一月)

『古事記』の文脈に沿って物語との結び付きを捉えていくことを目的に『古事記』の須佐之男命の歌を検討した論である。須佐之男命作と伝わる歌は『古事記』『日本書紀』ともに最初に見える歌であり、古くから注目されている。しかし和歌の起源として著名なこの歌は、歌謡を所伝から切り放し、その素姓を明らかにするとい

う方法が一般化している古代歌謡の研究史と同様、須佐之男命の物語とは無関係な歌としても読まれてきた。そのため、歌謡の素姓が明らかにされてはいるものの、このような方法だけではこの歌がどのような必然性によって須佐之男命と結び付くようになったのかを捉えることは困難である。そこで、『古事記』における須佐之男命の歌のもつ意味や担わされている役割などを考える上では、また再考の余地があるとし、『古事記』『日本書紀』両書における伝承の取り扱い方に注目することで、今まで見出されることのなかった須佐之男命の歌と所伝との関係を捉え直した。その結果、『古事記』の編纂者は須佐之男命の歌を通して地上世界全体を担い、天孫にそれを譲り渡す神としての役割を果たしている大國主神と須佐之男命との関

係を浮彫りにすると同時に、以後の『古事記』の一連の大国主神の物語を展開させる装置として活用していることを明らかにした。

② チョンテウク「近世における王仁伝承—王仁が伝えた漢籍に対する論議を中心に」(『日本學研究』35、檀国大學校日本研究所、二〇一二年一月)

近世において、「王仁伝承」が認められていく過程に着目した論。王仁伝承は日本文化の起源を示していたため、関心の対象となった。特に、主体的な立場で周りの世界と文化を把握し、日本固有の文化について再検討し始めた近世に至って王仁伝承に対する関心は一層高まった。王仁が「論語」と「千字文」を伝えたという『古事記』の伝承は様々な角度から検討され、多様な見解をもたらした。その始まりは「論語」についての疑問提起であったが、ほとんどの議論はその史実性に疑問の余地があった「千字文」の方にその焦点が当てられていた。そして近世において王仁伝承はほぼ事実として認められた。認められたとは云うものの、本居宣長のように王仁伝承について批判を強めた人がいたことも確かである。しかし宣長に対する喜多村信節の批判からも分かるように、近世において王仁伝承に対する批判は『古事記』に対する批判と同様に考えられた。特に『古事記』を聖なるテキストと見做していた国学者たちにとってそれは大きな問題であり、彼らは必ず王仁伝承の事実性を確認しなければならなかった。このような経緯で、近世に至って王仁伝承は始めて議論の対象となり、ジレンマを背後に抱いたまま検討された、と論じた。

④ イボンイル「『三國遺事』「延鳥郎・細鳥女」と『古事記』「新羅王子天之日矛」説話の比較分析研究」(『国際韓人文学研究』9、国際韓人文学会、二〇一二年二月)

『三國遺事』に出てくる延鳥郎・細鳥女と『古事記』に出てくる新羅王子天之日矛、説話を比較分析したものの。韓国と日本は歴史文化的にとっても深い影響関係を結んでいるだけでなく、地理的にも非常に近い。このような理由から、おそらく古代には数多くの延鳥郎と細鳥女らが韓半島と日本列島を往来し、文物を創造し交易したと考えられる。彼らも彼らなりに特殊な歴史的な状況の中でそうしたが、

彼らの行為の中には幸せな生活を夢見て新たな生活の基盤を求めて旅立つ開拓者の精神が満ちている。もう韓国と日本両国は、韓半島と日本列島を行き来しながら運命を開拓した古代人の文化的な業績に対して神話を越えて、歴史的事実として把握しなければならぬ。なぜなら、そうならば、いまだ近代的民族国家のイデオロギの枠組みの中に閉じ込められて暮らしている韓日両国の若者たちに対して、当時の自分たちの運命を開拓した彼らのように、未来の延鳥郎と細鳥女、未来の天之日矛と阿加流比売、になって北東アジアの未来の主役になれると言えるからである。そのため韓国と日本の歴史的な問題について、その根本的な根から反省しなければならぬ。このような観点で韓国と日本の若い世代は対立的民族主義を超えて、今とは全く異なるように、互いに向けた歴史の創造的地平を韓日古代文化で創出しなければならぬと主張した。

⑤ 金祥圭「大和王朝の降臨伝承に関する一考察—記紀の神代巻と天孫降臨神話」(『東北亜文化研究』30、東北アジア文化学会、二〇一二年三月)

天孫降臨神話は、最高権力を持つ天皇の神聖な性格と起源を語っている。天から降りて来る他の創立者伝承とは異なり、その出発点は南九州の山の頂上として設定されている。すなわち、米の穀霊が日向の高千穂の頂上に呼び寄せた場所に向かい、始まったのである。これは、過去に起こっていた歴史は言うまでもなく、実際に存在する土地とは無関係であるところから始められた意図的な神話である。そのような内容を持つ神話が、『古事記』『日本書紀』の神代巻の中に、主権を持つ政府の思想とともに完成された。そしてそれは未来の世代の歴史に合致していた。このことは、大和王朝が、初代天皇である神武天皇以前に起きた一定の事実として管理する世界で強く主張されたものである、と結論づけた。

⑦ 裴寛紋「『皇国』の「古事」で証明する世界—本居宣長『古事記伝』の注釈と方法について」(『日本文化學報』53、韓国日本文化学会、二〇一二年五月)

本居宣長の『古事記伝』そのもののテキスト分析を通じて、『古事記』注釈の営みについて考えようとする研究である。とくに注目するのは「皇国」という言葉

で、まず『古事記伝』の執筆過程において「御国(ミクニ)」の語が「皇国(ミクニ)」に変わって用いられている事実を明らかにした。そして『古事記伝』中の「皇国」が具体的にいかなる注解の場面に現れているのかを検討した。その結果、それは「皇国(の古)言・語」の用法を説明する際に最も多く見られるが、他にも「皇国(の古)物・事」、また「皇国(人)」など、さまざまな形で使われていた。なかでも宣長が「皇国」にかかわらせて、いかなる「古事」に関心を示しているのかを調査したところ、それはあらゆる風習的なものを総括するものであり、また常に「漢国」との対比で語られていた。宣長にとって『古事記』注釈を通して神代の「事の跡」を探っていく作業は、すなわち「皇国」の真实性を担保するものであり、そのことが「皇国」という自国アイデンティティの選択と主張にもつながる、と論じた。

10 金静希『古事記』『日本書紀』における「韓」―テキスト論的な点から―
 (『比較日本学』26、漢陽大学校日本学国際比較研究所、二〇一二年六月)

上代文献に現れた「韓」を比較して、特に『古事記』『日本書紀』の「韓」がそれぞれのテキストの中でどのように違った様相で現れるのか明らかにしようとした論。一般的に、「韓」は朝鮮南部の馬韓、辰韓、弁韓を示して、後に百濟、新羅、伽耶に発展したと見るのが定説だが、日本古代律令の「韓」は高(句)麗、百濟、新羅、唐とは区別され、具体的な到来物品の名前に付けられた例があるだけである。それに反して、『風土記』の「韓」はそれがどこを示すのか明確でないところを除けば全て新羅を示している、『万葉集』の「韓」は唐または朝鮮南部を示しているなどテキストにより、「韓」の姿は異なるかたちで現れている。このように日本の上代文献に現れた「韓」の姿は同一でない。そこでまず、漢籍、金石文、『万葉集』『風土記』中の多様な「韓」の姿を考察し、なぜ『古事記』『日本書紀』の「韓」を一括して考えてはならないのかを検討した。そして『古事記』には存在しなかった「三韓」の用例、特に「三韓」高句麗、百濟、新羅の概念は新羅統一以後に作られたことを明らかにした。次に『古事記』における「韓」を検討した。その結果、『古事記』における「韓」は外国でも蕃国でもない天孫に続く国つ神の子孫として

天皇の治下に収束される種族として表示されたとした。続いて『日本書紀』の「韓」については、『古事記』のように天皇の世界のような根源を持つ国でもなく、文物、技術の伝来国でもないこと、『日本書紀』の「韓」は「日本」とは差別化された政治的色彩が強い概念の蕃国となつて示していることを示した。最後に、これまで朝鮮の記事に対しては韓日ともにそれぞれの十分なテキスト分析がなく、一括なり、全体像をいう研究が主流をなしてきており、そのように作られた虚構の歴史が絶え間ない韓日歴史論争を呼びおこしたと指摘する。論争以前になければならないテキスト理解、戦い以前に先行しなければならぬ他者理解の過程を疎かにしてきたのではないかと疑問を投げかけ、さらに、省略なしに加減なしに、最初に返って相手の話を傾聴することの重要性を説いた。

12 チェウオンジェ「古事記神話における英雄の描き方―大国主神を中心に」(『日本語文学』51、日本語学会、二〇一二年十一月)

『古事記』に見える大国主神を中心に、古事記神話における英雄の描き方の特徴を見いだそうとしたものである。その結論として次のような三点にまとめている。一、少年でありながら優しくて知恵を持った英雄として書かれている。弱い者に意地悪をする兄弟の八十神とは違って、オホナムチは正しい治療法で素兎の皮膚を元の状態に回復させるといふ、優しさと知恵を兼ね備えた存在として描かれている。二、多くの苦難に遭いながらも、それをものともせず次々と切り抜けていく不死神として書かれている。最初は弱者に過ぎなかったオホナムチが、死と再生を繰り返しながら、いくつもの試練を克服したり、自分の住む世界とはまったく異なる別の世界への旅を無事に終えて帰ってきて王者の資格を獲得したりして、偉大な王者として変身を遂げる。これは古事記がオホナムチに王権の資格を与えるためにわざと死と再生の話を用意して新たな英雄を作り出していったのではないか。三、オホクニヌシの助力者として女性が登場する。オホクニヌシが危険な目にあつた時、母神をはじめ、多くの女性の助力によって様々の試練を克服することができるといふ。おそらくその背後には女性に象徴される大自然の生命力の守護がなければならぬという観念があつたのではないか。

[16] 魯成煥「韓国における『古事記』の因幡の白兔型説話に関する研究」（『日本語文学』60、日本語文学会、二〇一三年二月）

二〇一一年の「因幡の白兔」論、および6「韓国に兎説話を伝えた日本古代氏族—日本『古事記』の兎説話を中心に」に関連した論考である。（さらに19「東アジアから見た因幡の白兔説話」へと発展する。）韓国にも因幡の白兔型説話があり、民間伝承として朝鮮後期の文献の二つが知られている。すなわち民間伝承には麗水の梧桐島の兎説話があり、文献には『古今笑叢』の兎説話がある。この二つの話と因幡の白兔型説話とを比較すると、大枠は同じであるが細かい部分では違う箇所もかなりある。ベトナム及び中国の説話を加えて比較してみると、梧桐島の兎説話の場合、海を渡る方法はベトナムと同じであるが、中国および日本とは異なっている。次に報復が成功している点はベトナム、中国、日本と同じである。また、結末が由来譚になっている点は中国および日本と同じである。つまり梧桐島の兎説話は中国および日本の説話と親近性を有している。それに比べて『古今笑叢』の場合、魚族の橋を用いて川（水）を渡る点は中国及び日本と同一であるが、報復譚を持たない点はベトナム、中国、日本と異なっている。これらの点から、梧桐島の説話は中国及び日本と軌を同じくする東アジア的な要素が強い反面、『古今笑叢』の説話は典型的な極東アジア系に属する動物説話だといえる。このように韓半島では東アジアと極東アジアの二系統の兎説話が植民地期以前から伝わっていた。そして特筆すべきは、日本の『古事記』は水中動物の報復成功に伴う兎の怪我治療譚を持っているが、海外の同様の事例は少なく、韓国の梧桐島の兎説話が唯一である、という点である。それだけ韓国の因幡の白兔型説話はその地域のものよりも日本とよく似ている。この点は日本との比較対象として韓国が非常に重要であるということを示している。

[23] 朴信映「『古事記』『日本書紀』に現れた「禊」に対する考察」（『日語日文学研究』86—2、韓国日語日文学会、二〇一三年八月）

「禊」および「祓」について、使用例を調査した論考。日本の至高神と言われる天照大神の生成過程は『古事記』と『日本書紀』本文で違いが見られるが、第一の

違いは禊ぎという行為である。禊ぎについて、水を利用して穢れを除去することというのは、ほとんどの説明で共通であるが、『古事記』と『日本書紀』という上代文献の中でどのような意味で禊ぎが使われたのかを調べるために、まず『古事記』と『日本書紀』という文献の中で登場する禊ぎ伝承と表記を考察した。『古事記』と『日本書紀』で見られる禊ぎを意味する表記は、禊、禊祓、祓禊、があら。禊祓・祓禊 のように祓えを意味する 祓 と組み合わせた形の意味を調べるために、『古事記』と『日本書紀』で、禊 と 祓 が登場する部分を調査した。その結果、禊 は穢れを洗うという意味で使われていて、祓 は罪を償うという意味で使われたことがわかった。次に『古事記』と『日本書紀』で、禊祓・祓禊 のように、禊 と 祓 を組み合わせた形で使われた場合を調べた。禊祓・祓禊 で表記された場合は単に穢れを洗うという意味の禊ぎではなく、禁忌を破った罪を償う、祓 の意味が含まれた禊ぎであることがわかった。

[25] 李昌秀「日本古典文献に見える韓国系移住民の一考察—王権神話イデオロギーを中心に」（『日本思想』25、韓国日本思想史学会、二〇一三年十二月）

日本の神話伝承に韓国系移住民が与えた影響について論じたもの。『古事記』および『日本書紀』神代巻に描かれた体系神話は、上代日本の知識人の文学的な教養や精神文化の真髓が示されている大切な資料である。そこには、尊厳性を示そうとする政治的な意図に基づいて天皇家の祖先の由来が説明され、しかも、当時の中国や古代韓国からもたらされた漢籍及び中央と地方氏族の保有していた自家伝承が原典として活用されている。これら神話は記録者の教養や文筆力によって成立したものと見える。一方、神話伝承が文章という形で成立するためには、古代国家の形成に努めた有力豪族の活躍が必要であり、かつ、そのなかには優れた文章力を持っていたいわゆる朝鮮半島から渡来した移住民の活躍が窺われる。特に古代日本における文字の活用と記録には、韓国系移住民とその子孫の役割が大きい。また、大和朝廷において文字の解釈能力や文筆力により、政治的な役割を果たした人もほとんど朝鮮系移住民と言っても過言ではない。しかも、彼らは単なる事務レベルの技能集団にとどまらず、古代大和朝廷の学問と思想、さらに精神世界の形成にも大きな役

割を果たしたことがわかる。そのなかで王権神話という観念の根底には、日本列島に移住した韓国系移民の文筆力と豊富な漢文典籍を活用して蓄積された彼らの知識と昔の記憶が反映されていることも見逃せない。

注

- (1) 魯成煥「神話学から見た韓国の記紀研究」(『國文學 解釈と教材の研究』51—1 學燈社 二〇〇六年一月)
- (2) 研究動向に関しては注(1)及び、金祥圭「韓国における日本神話研究の現状」(『古事記年報』46 古事記学会 二〇〇四年一月)を参照した。
- (3) 田中千晶「韓国における『古事記』研究(一)——二〇〇〇—二〇〇二年の学術論文を中心に」(『水門』25 勉誠出版 二〇一三年一〇月)、同「韓国における『古事記』研究(二)——二〇〇三—二〇〇六年の学術論文を中心に」(『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』50 二〇一四年三月)、同「韓国における『古事記』研究(三)——二〇〇七—二〇〇九年の学術論文を中心に」(『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』51 二〇一五年三月)、同「韓国における『古事記』研究(四)——二〇一〇—二〇一一年の学術論文を中心に」(『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』52 二〇一六年三月)
- (4) RISSは韓国教育学術情報院によるデータベース。韓国内学術誌論文、海外学術誌論文、学位論文、単行本、学術誌などを検索できる。韓国内の学会及び大学附設の研究所が発行する学術誌の論文は約三五〇万件、学位論文は約一—四万件が収録されている。(収録数は二〇一三年十二月末基準) <http://www.riss.kr/index.do>
- (5) KSI韓国学術情報(Korean Studies Information, KSI)によるデータベース。韓国内二〇〇余の学会及び研究所と著作権契約をされており、学会誌及び研究刊行物に掲載された約九〇万件的論文をPDF化し収録している。 <http://www.papersearch.net/>
- (6) Nuriimedia社が韓国最大の書店・教保書店とともに提供する学術情報データベース。約一七〇万件的論文、一八〇〇種の刊行物を収録(二〇一四年三月基準)。 <http://www.dpia.co.kr/>
- (7) 二〇一六年十二月十四日現在。漢字「古事記」もハングル表記「고사기」も同数の二五七件である。
- (8) 韓国の学術誌に掲載された日本人研究者の論文を含む。
- (9) 年表には日本人研究者による論文も掲載した。要旨は、原則として韓国人名の筆者による論文を選択し、私に翻訳し要約あるいは筆者による要旨を簡略化した。論文名等は適宜日本語に変えた。

“Kojiki” studies in South Korea (5)
—— Academic papers from 2012 to 2013 ——

TANAKA Chiaki

Abstract : In this article, I introduce the study of “Kojiki” researches in South Korea. I will analyze the academic papers on “Kojiki” after 2000. South Korea has worked on its researches in full scale the 1980’s.

The similarity of the myths of Japan and South Korea, and the descriptions of the Korean Peninsula have been discussed there.

Key Words : Kojiki, Nihonshoki, South Korea

要旨：韓国においては、近代に入ってから『古事記』の研究が始められた。朝鮮半島に関する記述の存在、神話の類似性などが研究対象として関心を持つ理由であり、本格的に研究が進展してきたのは1980年代以降である。その研究方法は大きく次の二つに分けることができる。一つは日韓の神話を比較し、日本にいかにか文化的影響を与えたかを解明する研究、今一つは『古事記』『日本書紀』の特殊性をそれぞれのテキストに分離して探る研究である。方法の異なる両者を結び、且つ韓国の『古事記』研究の転機となった研究が、魯成煥『日本神話の研究』（報告社、2002年9月）といえる。本稿ではこの『日本神話の研究』を転換点とみなし、刊行前夜にあたる2000年以降、どのような視覚から『古事記』が研究されているのかについて、韓国内における学術論文を紹介する。

キーワード：古事記、日本書紀、上代文献、韓国